未来をはぐくむ

地域と歩む子育て

第７部・手をつなぐ住民（上）

第 17 回

初版発行：2011 年 6 月 24 日

世代超え全員主役
互いを知り大きな力に

2010年10月26日掲載

「そーれ、そーれ。ガンバレー」。一本の綱を引っ張り合いながら、元気な掛け声が響く。

まだおむつをはいている女の子や、すっかり銀髪のおじいちゃん…。多彩な顔触れが一直線に並ぶ。どの面々も、佐伯市鶴岡地区を元気にしている大切な〝主役〟たちだ。

10月のある平日。地区内の「つるおか子どもの家」で、乳幼児の子育てサロンが開かれた。1カ月後の運動会に向けて、親子49組が綱引きを練習。〝助っ人〟を頼まれた老人会の4人も一緒に汗を流していた。

子どもたちと老人会との対戦は、ママも味方に付けた子どもたちの勝利。老人会長の小野格重さん（78）が「あー参った！」と叫ぶと、会場はどっとわいた。

「子どもの家」に子育て中の母親らが運営に携わって18年。日ごろから地域の主婦やお年寄りも子どもたちの顔を見にやってくる。遊び相手をしたり、畑で取れた野菜を差し入れたり。親でさえ知らない昔の遊びも教えてくれるその存在は、こ

「よーし、引っ張れー」。老人会の“おじいちゃん”たちの掛け声が、綱引きをさらに盛り上げる＝佐伯市・つるおか子どもの家

の「家」に通う１００人近い子どもたちにとってあこがれでもある。

今でこそ老若男女でにぎわうが、そこには長い試行錯誤と母親たちの深い反省があった。

子育てに地域住民の手助けは欠かせなかった。「なのに、母親自身が地元の大人たちを知らなかった」。開設当初から運営に携わる冨高国子代表（54）は「まずは大人同士がつながらなければ、という思いがあった」と打ち明ける。

たこ揚げなど催しのたびに、住民に協力を仰いできた。毎月１回は手書きの「家だより」を各世帯に配り、子どもの様子を伝え続けた。地域の目を子どもに向けさせる努力が、大きな支援の輪を生んだ。

「家」に通う幼稚園児が、地元のスーパーでママの知らないおじちゃんといきなり立ち話を始めた―。そんな話を聞くことも、今では珍しくない。冨高さんは「地域がつながってるな」とうれしく思う。

もともとは「子どもが安心して遊べる場所」を求めて始めた活動だ。しかし、冨高さんは「ここが唯一の居場所では駄目。地域全体が子どもの〝おもちゃ箱〟であってほしい」と願う。

一方で、さまざまな子育て支援の取り組みが、親子が触れ合う時間を奪ってしまってはいけない、とも自省する。

「本当に子どもに必要な支援は何なのか。いつも〝子どもが真ん中〟の目線で考えていきたい」

県内各地に育児支援施設がある。だが、子育て中の家庭を支えるのは、その関係者だけではない。周りにいる子育ての一段落した主婦やお年寄り、民生委員も重要な役割を担う。第７部「手をつなぐ住民」では、地域ぐるみで子育てを助け合う形について探る。

つるおか子どもの家の活動

- **放課後児童クラブ（平日）**
  幼稚園児も対象。曜日ごとに屋外探検や地域住民による手品会などを企画
- **子育てサロン「トトロの広場」（毎週火曜日）**
  就学前の子どもが対象。無料（おやつ代別）
- **その他主な活動**
  「子どもの家だより」の発行（毎月１回程度）、番匠川で川遊び（夏休み中毎日）、老人会との交流会、保育実習の受け入れ、介護教室の開催など

【つるおか子どもの家】

放課後児童クラブや子育てサロンなど育児支援の拠点施設。現在、育児経験のある女性ら１１人が指導員として働いている。旧鶴岡公民館を借りていたが、今年１月に市が育児支援施設として新設した。両親が共働きなど、支援の必要性が高いと判断した子どもを優先的に受け入れている。地域交流も活動の柱にしており、民生委員の定例会や介護教室も開いている。

緊急時は「まかせて」
援助会員、数の確保が課題

2010年10月27日掲載

仕事でどうしても保育園や塾の送り迎えができない。ちょっとだけ育児から離れたい―。身近に頼れる人がいない親の「困った」「息抜きしたい」といったニーズを、地域住民が有償で支える互助組織。それがファミリー・サポート・センター（ファミサポ）だ。

「よろしく（依頼）会員」が122人、「まかせて（援助）会員」が25人登録する玖珠町ファミサポ。10月中旬のある日、よろしく会員の母親2人が短時間の託児を頼んだ。午後6時に始まる職場の会合に出るためだ。

2人のまかせて会員が会合のある場所に出向き、託児がスタート。1人がママ恋しさでぐずりがちな2歳の男児をおもちゃで巧みにあやし、もう1人の腕の中では生後3カ月の赤ちゃんがすやすや眠る。長年の子育て経験もあって、小さい子の世話はお手の物だ。

「関東で働きながら子育てをしている娘が、

援助会員と依頼会員―地域ぐるみで子育てを支えるファミサポは、住民同士の信頼関係が原点だ＝玖珠町内

ファミサポでお世話になってね…」。託児を担った麻生邦子さん（66）は会員歴７年のベテラン。

「娘のように、育児で困っているお母さんの役に立ちたいんです」

一時預かりを依頼したよろしく会員の吉永加代さん（35）も「いざというとき、育児の力になってくれる存在。まかせて会員の皆さんは同じ地元で顔なじみの人ばかりだし、すごい安心感がある」と頼りにする。

年間で４千件近い利用がある大分市ファミサポ。

依頼会員は１０９２人に上るが、援助会員は半数以下の５１７人（どちらも可能な両方会員を含む）にとどまる。緊急の場合に備えて気軽に登録できる依頼会員に対し、実際に子どもを預かる援助会員の確保はファミサポに共通する悩みだ。

さらに―。塾や習い事の送り迎えを見ても、車の移動を伴う長時間、遠距離化の依頼が増えている。

「ニーズが多様化し、応えられる援助会員が見つからないケースもある」と大分市ファミサポ事務局。

依頼、援助両会員を仲介するマッチングもそう簡単ではない。

それでも同事務局には、援助会員から「子どもに元気や笑顔をもらった」「大変だけどやりがいも大きい」といった感想が寄せられる。

依頼会員からも感謝の声が届く。ファミサポは子育て世帯と地域との間に確かなきずなを生んでいる。

あとは、揺らぎつつある需要と供給のバランスをどう保つか―。住民同士をつなぎ、地域ぐるみの子育てを広める鍵がそこにある。

【ファミリー・サポート・センター】

保育所や小学校が終わった後の一時預かり・送迎などを頼みたい依頼会員と、手助けしたい援助会員がそれぞれ登録。センターの仲介で〝契約〟が成立すれば、援助会員が有償で育児を担う。料金は大分市の場合、平日の午前７時～午後７時が１時間600円、それ以外は700円。県によると、大分、別府、日田、竹田、豊後高田、宇佐、豊後大野、玖珠―の計８市町で活動している。

「入り口」は民生委員
自治体との情報共有重要

2010年10月28日掲載

全国には、地域住民の暮らしを見守る民生委員のネットワークが網の目のように広がっている。地域をくまなく歩き、生活の相談に乗る委員たちも、母親の子育てを陰で支えている。

大分市の西部公民館。春日町小学校区の民生委員や育児サークルのメンバーが、乳幼児の運動会を開いた。

そこに、4月に引っ越してきたばかりの主婦、酒井由貴さん（29）と長女の悠衣（ゆい）ちゃん＝1歳1カ月＝の元気な姿もあった。

「うちの子に歯が生えてきたの。今度、歯磨きの仕方教えてね」。

競技の合間に、少しずつ増えてきた〝ママ友〟たちとお食事会の約束もできた。親子の活動の場が、また広がった。

酒井さんは地区の民生委員らが毎月1回開く育児サロンのメンバー。足を運ぶようになったきっ

引っ越してきたばかりの土地で、運動会に顔を出す。酒井さん親子は民生委員に見守られ、地域社会に少しずつ溶け込んでいる＝大分市の西部公民館

かけは、赤ちゃんが生まれた家庭に図書券をプレゼントする取り組みを利用したこと。

申し込むと早速、民生委員の宮崎さち子さん（61）が千円分の図書券を携えて自宅を訪れた。酒井さんはそこで子育てサロンや地域の育児活動を教わった。

宮崎さんに誘われ、地域の盆踊りにも〝デビュー〟した。「宮崎さんとの出会いが地域に溶け込む一歩になった」と酒井さんは感謝する。

大分県内では、民生委員らが主体の子育てサロンが90以上活動している。保健師と一緒に民生委員が赤ちゃんの生まれた家庭を訪ねている地域もある。

「民生委員は地域に広いネットワークを持っている。育児に追われる母親たちを、何とかして地域の支援の輪で受け止めてあげたい」。宮崎さんは熱心だ。

ただ―。プライバシーがますます重視され、ベランダに布おむつを干す風景も減った現代。民生委員が子育て家庭を把握すること自体が、難しくなっている。

県民生委員児童委員協議会の安部敏朗会長（74）は、「市町村は新生児の名前や住所を把握している。その情報を共有していくことが大切だ」と考える。

今、新生児の情報を地元の民生委員組織に伝えているのは日田、豊後高田、竹田の３市だけ。

情報管理を不安視する声も一部の自治体にあるが、安部会長は協力を求めていく考えだ。

高齢者の孤独死や幼児虐待があった場合、警察がまず頼るのも民生委員。社会からの期待は極めて高い。

「地域の求めに応えられるだけの体制づくりが必要。委員の〝奉仕の精神〟をなえさせてはいけない」。安部会長は強く訴える。

民生委員の仕事

- 世帯状況の把握（虐待やDVの早期発見と予防）
- 情報提供（母親サークルなど世帯が必要とするサービスを知らせる）
- 相談、援助（子育てサロンなどの支援活動）
- 関係機関との連携、協力（児童相談所、保健所、学校など）

【民生委員】

厚生労働大臣が委嘱する非常勤特別職の地方公務員。児童委員も兼ねる。交通費などは一部支給されるが報酬はない。任期は３年。毎月市町村に活動記録を提出するほか、家庭ごとに家族構成などを記した福祉表をまとめる。守秘義務がある。委員の中から、児童専門の主任児童委員が指名される。大分県内では今年４月１日現在で 2865 人（定数 2872 人）の委員が活動中。

■オオイタデジタルブックとは

オオイタデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたいと願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「未来をはぐくむ」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！！

大分合同新聞社　NAN-NAN　別 府 大 学

デジタル版「未来をはぐくむ～地域と歩む子育て～」　第 17 回

編集　大分合同新聞社
初出掲載媒体　大分合同新聞（2010 年 4 月 20 日～ 2011 年 2 月 12 日）

《デジタル版》
2011 年 6 月 24 日初版発行
編集　大分合同新聞社
制作　別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部／川村研究室
発行　NAN-NAN 事務局
（〒 870-8605 大分市府内町 3-9-15 大分合同新聞社　企画調査部内）

© 大分合同新聞社

●デジタル版「未来をはぐくむ」について

「未来をはぐくむ」は、大分合同新聞社が 2010 年 4 月から翌 2011 年 2 月まで、同紙夕刊に掲載した連載記事。今回、デジタルブックとして再構成し、公開する。登場人物の年齢をはじめ文中の記述内容は、新聞連載時のもの。

閲覧には Adobe Reader をご利用下さい。ほかの PDF ビューアではリンクやボタン機能が使えない可能性があります。

2011 年 3 月 4 日　NAN-NAN 事務局